佐伯史談

第一一八号

「郷土史研究」誌
通算第一四〇号

昭和五十四年五月八日 発行

佐伯史談会

事務局 佐伯市大字鶴谷字龍護寺 羽柴方

巻頭言

機関誌「佐伯史談」の使命

―謙虚に、そして確信をもって―

佐伯史談会副会長
編集者 羽柴 弘

こんな粗末な機関誌であるのに、何故か今、新しい入会者がつづいている。それもどちらかというと、中年の婦人の方が多い。このことは、この号でも ページの名簿をごらん下さってもおわかりいただけると思う。

最近の会員数の激増については、「佐伯史談」の編集、印刷、発行、発送の事務に当る者、全くうれしい悲鳴をあげつづけている。すでに手刷り謄写印刷の限界である。そこで、今回思い切って、音沙汰のない会員の整理をした。

多年ご愛顧をいただいて来たのに、そのつながりを断ち切ることは、いやであるが止むを得ない。整理はしたものの名簿から全く除いたわけでない。機会があれば旧誌により機関誌をお届けもしようし、現地研修の際などお手引きしていただくつもりである。そんなところでご寛恕をお願い申したい。

新参加の方は今後さらに歓迎し、史談会の体質を、更に清新なものにしたいと考えるが、機関誌「佐伯史談」も停滞やマンネリ化を避け、生々進展を期したい。

佐伯史談会の「佐伯史談」、機関誌としてこれでよいのか と、私はたえず自問・自答しながらの二十年であった。幸い熱心な会員多数の協力、理解ある有志の方々の賛助・援援があって、号を重ねてここまで来た。

しかし、今号でもご覧の通り、世上一般の地方史・郷土誌に比べて、形はともかく、内容についてもかなり趣きを異にしていることにお気付きであろう。

毎号の執筆者は勿論会員であるが、書いてあることは、中には郷土佐伯からはなれた四国の霊場巡りや、遠く

本号の内容

巻頭言 「佐伯史談」の使命（羽柴 弘） 一
舞 長崎三良と徳富蘇峰（郷土研究） 三
紀行 四国の霊場を巡って（清田義雄） 七
随筆 四国霊場巡拝の旅（川田瑞） 一一
随筆 佐伯と四国独歩（山内武麿） 一五
「今宮さま」の本殿（佐藤貫一） 一九
隠想 文学と料理記（羽柴 弘） 一九
紀行 鳴門秘話と薬王寺（平田） 二一
物語 藩祖毛利氏公（一）（郷土研究） 二五
報告 中国諸国記（古藤田太） 三八
紀行 小田井堰立札（山本 保） 四一
随筆 中の谷そぞろ歩く（中村利男） 四三
紀行 羽先崎の歴史と民俗 五五
図書紹介・会員消息・外

海外の韓国や中国の旅行記まで載せている。四桁や四家や竹田・三重など、県内各地のことはいうまでもない。

それはまた地域だけでなく、毎号かなり厖大に直接ふれてない、地誌や民俗や、文化や教養その他に初めて少々これはどうかなと思う内容のものも載せている。これらもすべて五百会員の見聞きされ為め、わが郷土を見直すための研修の助けになることを信じている。

そんなことで、これは学術研究誌ではない。会員共通のふるさと「佐伯」（もちろん郷土を愛する同志の集まりで、会員が交した談話をそのまま載せたものだと言えよう。）従って本誌の内容は出たとこ勝負、二、三の連載ものの外は毎号いろいろバラエティーに富んだものが盛られていると思う。会員の皆さんはこれを一つの手がかりにして、それぞれの地域で実践活動に当っていただきたい。

さて、大分県は昭和四十九年来、「ふるさと振興運動」をすすめ、立木県政の看板の一つになった。おそかもよし佐伯城三の丸櫓門の修築をはじめていた時とて、その対象となり巨額の助成金をいただき、これに佐伯市や南郷の助成も加わり、史談会最大の事業を完遂することが出来た。今にして思えばそのことの提唱呼びかけ、事業と事務の推進に、小誌「佐伯史談」の果した役割は大きかった。

同年十一月、佐伯史談会は「……県民の愛郷心の高揚に寄与した」として立木県知事の顕彰をうけた。これは文化団体としては最初のことで、われら大いに意を強くしたものである。

史談会が企画・主唱したいろいろな催し、創立は資料展・講演会・講習会・現地研修会・研修旅行等々、大小数多くの事業その悉くがこの「佐伯史談」誌上に提唱され、実践の上は記録して誌上報告という形をとった。つまり史談会の働きは、その殆んど凡てがこの機関誌によって為されたと言ってよい。先輩・長老を訪問して話を聞くことも、研修会や旅行のこと、予告・参加者の募集まで誌上で呼びかけて来て、機関誌としての機能を充分果して来ていると思う。

佐伯市・南郷内は勿論、県内各地から遠く東京及びその周辺各地にわたり、わが佐伯史談会と「佐伯史談」の評価は高く、会員・賛助者は増える一方である。尚マスコミの支援、大分合同紙はじめすべての日刊紙、それに地元佐伯市内の郷土週刊紙が、目覚しい行事は記事にとり上げて下さっていることも、以上のことがを大いに助長している。ありがたいことである。

「ふるさと佐伯」は、生々流動している。昔からいわれたことをくり返しながら、それに時世の変化を加えつつ、限りない進展の途をたどっている。だからそれに応じ、いや時には先導の立場をとって、地域ふるさとに貢献しなくてはならない。

その辺にこの「佐伯史談」の使命があるのではあるまいか。全会員の結束を望むこと切である。

（以上）

〔メモ〕

昭和三十三年三月十六日　佐伯史談会・鶴岡郷土史研究会発足

同　　年四月　両会機関誌「郷土史談」の内「郷土史研究」と改題　二十二号まで発行、昭和三十六年七月しばらく休刊（連絡・通報はその都度はがきによる）

昭和四十年二月　「佐伯史談」と改題　第一号として発行

昭和五十年五月　第百号達成　この前後隔月発行を季刊とす

昭和五十四年九月　第一一八号　印刷　五四七部　以降年来年五回発行